雅莚醉粧集

夏之巻

中村俊定文庫
文庫 18
1025
2

子孫永保
共八卷
家
書記

中村俊定文庫

霊澤藏書

雅楚醉狂集夏之巻

風水軒皇翁 著

齋藤藏書

霊澤藏書

○初夏

夏雲花染名殘色　衣暴云天香具山

百人一首　拾統天皇天の香ぐ山に衣ほすてふ白妙の衣ほすてふ白妙の衣ほすてふ白妙の

衣いそかるものゝ為ハ○宮仕百姿
はなはきゝふきてをるゝ白雪の
面影うすく衣ゝ

○更衣（カウイ）

数多（アマタノ）女御（ニヨウゴ）自（リイフノ）何（ニ）　首夏例（ノイレ）来（ル）此更衣

相壺の岩ゝ何ゝ御時より女御更衣ハ
きさきゝ也狂げる○狂句ハ女官の更衣を
右ゝ取なり

○郭公

人はゝる用ゝ初音の時ゝ　ゝ　ゝ　

人告ていはく此時ふと稲妻ひらめく今
朝和の刻ほどうと若ゆへ和尚
の月を云義なり
なき時ふるのまつかまるも祢ずゝ山時雨
岩松の詩に上有百尺絲と作り絲い兎
絲を猛して和洲祢ずゝ也山のまつは
仏中ほ待ふる義ほ侍ん歌もあり又人の操
ほ侍ゝ歌もあり○根を音ほよゝ侍る歌
古今集ほ侍人不知　思ひみいはらのきの

松ゝ歌ほ祢ほあゝたまゝく鳴ぬゝ也○牡
鹿い時雨ふる時ふ鳴ゝ侍ゝ也なるゆへ今ゝと行れる
いまゝきゝ侍い音のなき事ほ侍ゝ
立て松とかゝゝほよゝへて侍作
行ほ賞和杉の木枕ゝくしてゆる者ほ見ぬはらきに
苞祖禹集司馬温公以圓木為警枕
少睡則枕轉而覚又起讀書○吳越
備史云錢鏐武肅王在軍未嘗睡未年
用圓木作枕熟睡則欹名警枕踊折

中不睡龍○論語子曰吾不復夢見周公○此句より杉を讀い西行が時雨の
おとゝ狩衣土筆杖下より出きり

百人一首の哥はとゝきすで有明の高とゝら雪
百人一首より後徳大寺左大臣ほとゝきす鳴つる
かゝる紙袖もまいの雪で有明の月ゝ袖まる
回云志岑有明のつまれくみしあれよ
曉ばかりうきものはなかしまし又云是則ゆさば
ら雪有明の月とゝまでゝ吉野の里ゝ

有明る月ゝ雪○牡丹の花い時雨ゝ有
明の月紙結び方百人一首ゝ只一首や
哥ゝ雪ゝ有明を撰ゝ雪ゝ義や
唯の字和哥ゝ者を特ゝ尺へし
和哥の月ゝ雪ゝ雨の松ゝ乃さ角で一時の名金
東坡が春宵一刻の値花の下ゝ出きり
酒去来の辞の言葉ゝ雪ゝ山ほゝ出きた
関明酒去来の辞ゝ雪無心ゝ出曲鳥傳
乳而知還ゝ此句ハ石如師ゝ明ゝの

瓠向（ヒサウ）

罵紅（ヒヨクコウ）の緑（ニシキ）を尋（ニモ）ねてろまて年（ネン）るかゆ花かく咲きに
郭公は罵帝（ティ）の魂（タマシイ）と云て記ふ及
はるのたゆ緑とはなづきは茱萸（クスリ）ぞ。。きく庖瘡（ホウソウ）の山ほとゝきに
ゆ山ぎくは氏香（カウ）ゝたつ緑のほゝ花
○おぼ〳〵く弦よ
郭公はなく加ら松をうほし絵はなを弦ゆ花の月
を花はのおぼ前よ出ゝり○おぼい野を少
を独よ早くゆ紀げるゆ弦ゆの由や

ゆ独は絵なるゆ加ら花をうゆ花て声
なをふゆり狂ゝ弦ゆなり弦の字よ眼
を弦へ〳〵
○早苗（サナヘ）
民家は園の年。。ゆの見ゆ家苗（ダイ）ゆ。。弦ゆら
書経（ニ）民為（ハタリ）邦本（クニノモト）○管子（クハンシ）有道（ユウトウ）之君執（トル）
年（ヲ）○狂ゆの高い家苗ゆ取い民の業（ニワザ）なゆど
和奇の影ゆは君も取ゆ星を虫ゆ推量（オシハカ）
星をゆふ人生（ヒンセイ）続命（ゾクメイ）の年い五穀（コリ）なり其ゆ

い民力なるゆへ民は長生なるよりの事
なるべしと云義なり秋の田は苅納を
農業なれども苗い其ちゞめなる
ゆへ云なり云は云ふさる事なきを云
ど底まい微意を合蓄ひり昔い敵上
まち紀ぬまのまんじと云あてを称より
百姓納米れ拾は叡覧あるべしと云
弦乃仏作りまと祈年穀の事帝い豊年
の序初なり石墻田の奏なども民を治る

みゆるその義也は二件い公事い根原よりあ
り　仁徳帝の御製云ふ所民のゝ困ぐいゆゑ
見物いあり立民のゝ困ぐいゆゑ
ゝ　又詩経七月の章よ三之日于耜
註　周公以成王未知稼穡之艱難故
陳后稷公劉風化之所由使聲勝朝
夕諷誦以教之又礼記月令云是月
也孟春天子乃以元日祈穀于上帝
乃擇元辰天子親載耒耜云帥三公

九卿諸侯大夫躬耕帝籍天子三推三公五推卿諸侯九推下○李紳が
悯農詩云鋤禾日當午汗滴禾下土
誰知盤中飧粒々皆辛苦と作まり
此詩は天子よりからめ事那の序より記すか
ごの半巻数かゝ今其一二を取のこ○
稲荷の社を五穀社神と申候ハ宇賀
なる神にさゝなる紀あれ〻ゝ孫と此神徳の義
ハ別て極秘口訣あり〻あれ〻ゝ二○或人問
を見て一首よかはどもちゝ賀註是
ともゝ云ふ神に答て是此帝徳之所重
人命之所係而不容易之事則豈黙
然緘口乎因以贄矣云々独い人頷
き点

茨花

縫。ゝるむばらの針の事のちなほ。ほゝるふもよ紀代名の邪
字はゝ〻ゝ〻ゝるも針あり茨をも人のゝゝるのゝゝなよ
ゝ事ひつゝむゝ〻ゝ〻ゝ〻

俗語の針脱袋とゝ張りする張る事よ
云なり史平原君傳ニ毛遂ゞ囊中
錐ハ別事也

○おぼゝく魚鱗よ

思ひけどゝ女床の魚をのゝ表れるむゞの針を
ゝ

○美き女の茨の色を研茎まで指ゝ赤の絵よ

ゝ女の色の色ゞ色ゝ茨のゝと針
晉史云顧愷之妙丹青挑一隣女不
従畫女形千壁以棘針釘其心女心

痛愷之因致其情女從之去針而愈

狂ふ物のゝて針を紀也

○新竹

生ゝ出ゝ竹。すぐれる竹の子。竹の子。竹の子。

○螢

清みあるかまて進れとも尻よほうれ光みすゝ弃
伊勢物語よ男ゆゝしよきを女いとかゝくて
ものよをうらてをひゆけど身を進つゞ清み
乃あるかよりゝ子○狂おい人進やる人の
ゝあ尻よ光ゝ尺をるかゝくなり
書いかはてゝあとゝ見。身すく紗の堂ゝ知恵ゝ信も月夜の螢
晋史云車胤家貧以紗囊盛螢照書
○古詩和影上紗總○前漢晁錯傳

云錯以辯得幸太字〻〻〻蹕曰智囊
又晋宣紀云大司農桓範出赴曹爽
蒋濟言于帝曰智囊往矣○史記云
樗里子滑稽多智秦人號曰智囊○
南宋史云齊江泌隨月讀書月光斜
則握書升屋○狂おいふ学ゆゝ智恵と
月夜の螢のゝゝ光ゆゝゝなゝゝなるを云沙囊
を宮と智とゝ結活す月い恵ゝと云かけゝり
論孟の集注をよむ宮のお朱点のゝゝほうゝ乱ふ

高駢詩ニ云滴露研朱點周易一○栄子
学を貴ばして朱砂點するかと云義也

はぎの花みだれむ宮のおぼ子たちして蛍尺ぐ
鄭谷詩ニ夜深雨絶松堂静一点山蛍照寂寞一○杜甫
指云

高砂の星の川のほたる。鴨。祢宜すむかも。妙。明の火ろ
伊勢物語ニ情ある人の星の川をあの蛍かと我すむ
方のあまの火ろ多く集うさかしのかるふ

鴨の字を用ひ
宇治川の搖いひくろ水いうなぐ蛍いでうつ夏ぐ
王建詩ニ輕羅小扇撲流螢一○杜甫ハ宿
の形政の句を厳ぎ此ぎろ古戦場ゆ
ろ云

蛍ー火ハ曲ー池ノ炎
茶ー苑　蛍　火ー色
花ほろ　たぐこの火をくはぎ煙筒
○新茶

新ー茶 壺 温レ 故

論語ニ云 温レ故而知レ新 ○狂白形故を我々

クハヤリ

漫興

鰎ー茶 北ー鼻 苑 揉ー砲 彼ー鬚ー田

字彙ニ云 砲 小ー瓜 ○鰎ハ鼻より云對白

ハ揉ー鬚なり

○下御靈神ー王信直 ○ 白形を對をと麦げ迄ハ

五ー口 鈴ー生 杏信直 三ー頭 輪ー切 瓜玉

五ー鈴 ○三輪なり旧記ニ鈴一口二口と書り

○瓜を舟中ニ浸し ○ 絅の破を一ツ取て

汐ー垂 ○ 如ー ○ 絅の布を ○ 瓜の一ツを井

字彙ニ井ハ投物井中ー聲也 ○ 絅ハ細の

投ー ○ 云

姙 瓜

姙瓜ハ人のちぎり紙ー ○ ○ ○ 瓜ハ ○ 丸形

瓜を厭ちぎるとなる ○ 云瓜ニ形を

如ー月 ○ 女の形とする故形と云

瓜をたべるに皆つゝもいまきあるの玉のごとくなる小姫。
瓜の花
瓜は字いはめあなゝ瓜の字いはめあり　結縄
よ類如玉　○俗よ角びの瓜をたべて
ゝ皆つゝ瓜弱あり
○姫瓜は姫百合のまゝ瓜弱
新奇ゝすのこを花はおごらめる瓜とゝりとはかゝ姫。
伊勢物語よいとなまめいる女はゝ好ゝ侍ゝ
とゝ新い瓜弱い百合なり
○瓜ゝ李の実をたべる弱よ

園瓜　瓜垣なのすゝよむ苔かゝるまい達塩すゝきら
支木は長方　紫かゝ宝玉の一ゝよ
ゝゝゝ

○桃子の絵賛

深ゝ[illegible]筆の毛桃のほゝ。なゝ紙三子[illegible]ハ絵ゝ[illegible]

彩擬古帖子光後あゝ稀さ多ゝ[illegible]ゝ[illegible]目の

本のむゝ[illegible]の毛ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]○漢武故

事ニ云 王母種桃 三千年一開花 三千

年ニ一結子 ○拾遺集ニ躬恒 みちゝ[illegible]

なゝ[illegible]桃のゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゝ[illegible]邪○狂歌ハ絵筆をゝ[illegible]ゝ[illegible]より実の

不迷なゝ[illegible]三ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

せはゐの初も筆より云絵ハ実ハ実よりなき

ゝ[illegible]ハ出なゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]絵ゝ[illegible]ゝ[illegible]云

○梅子

いゝで実ゝ[illegible]ゝ[illegible]我園の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]三ツ七ツ

陸務観梅詩ニ云 何方 方術ヲ云 又ハ何ノ処 可化身

千億ニ一樹梅花一放翁 ○詩経ニ云 摽

有梅其実七ツ摽有梅其実三ツ

梅の実ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ハ狂歌詩種の意を[illegible]して云梅子ハ青熟を

○影ちらし

今年五月旱相續杏子桃梅鮮美仁

論語ニ云巧言令色鮮美仁○本文仁

徳の鮮を杏桃梅の実の仁を取なり

○楊梅

我家の木の実これなり楊貴妃ちなんで楊貴妃の薬ぐ

楊妃外傳ニ云貴妃嗜荔枝當時涪州

致貢ル馬遞駅載七日七夜至京人

馬多斃ニ於路ニ百姓苦之○杜牧詩ニ云

一騎紅塵妃子笑無人知道荔枝来

註 言急馳之状○東坡荔枝歎云宮

中美人一破顔驚塵濺血流千載中

天寶歳貢取之涪至令欲食林甫肉

註 李林甫相玄宗不能諫止荔枝之

貢天下怨之欲食其肉○世説云楊

氏子九歳孔君平詣其父設楊梅菓

孔曰此實君家菓答曰未聞孔雀是

孔子家禽○杜牧の美人妃も楊氏なれい

我家の菓を食ふ所屋根よりはなれいでて菓枝を多く芳民をなやまし家と也

○五月雨

ひさかたの中なる文字は傾き笠ひろ打出のかぶちあまこの形古今集よりこれ久堅の中なる川の格式ぶいふ繋りて雪を待人○夫木よりあまの川原に旅人の目にたゝ出ぬん笠ふらきさる有明の月○月の暈を俗よ月の笠ゝ云○元家の久堅中ゝ桂川なり

狂歌の中なる文字は月なり

五月雨は上下ばかりの非花人所まよりの三家の匠

黒雲 梅雨天 龍寺 臥浪橋流 大井川

杜牧阿房宮賦云長橋臥波未雲何

龍

○橘花

立よりてをゝちびの香をかげい達知りも鼻のさきなり

古今集よ読人しらぬ五月まつなる橘の香を

けい者の人の神の香をする○俗よ今き事を

鼻のさきにて云

右近清原のもとすけの歌

新拾遺集に 法皇御製 ほとゝぎす

の立ちの名ならなめり 世で遠さかり ○ 新撰

六帖 ほとゝぎす ちもの多くかぐみ 表もよ

法 ○ 花きりも ○ 橘川院百首

那仲 家雲の ちの文 ほのかなる

ら ちなり 季 あるい 実なり ○ 百人一首

ま 右近 ほとゝぎす 分 ほとゝぎす

人の命の如くなるもみな邪 ○ 紅おい 清

より右近が歌二の白 実 なを

の名 合 那仲 実 賞

う 紅 白 云義

立 ほとゝぎす 鼻 ほとゝぎす 階

○ 蓮花

ゆよ 時 ら 沢 月 酒 友 ゆ ら あ 紀 ず 色

禮表記云 君子之交淡如水 小人之

交甘如醴 ○ 周茂叔愛蓮説 蓮花

之君子者也○杜子美詩云
如二含ル
日の中の玉ゆゑ
日本如君子国云云
○杜子美詩云
おとめ
たをやめの花とる乙女の袂の
李白採蓮曲若耶溪傍採蓮女笑倆
荷花共人語日照新粧水底明風飄
香袖空中舉見此躇躇空斷腸
○韓偓詩捲荷忽被微風鴉瀉下清

香露一盃○仙江国志なとりの前より蓮多
くあるゆゑ呂もあんとかすもり採蓮の事
船中に出せ及たる故をもて事あるは
呂もあんとりゆゑ也
○扇
みち月のきらゝかあるとゝむ言ぬ
第第集に淡人志淡の相ゆ陽丘
みち月のきらゝあれいをゝ夜深り○杜甫
詩云香羅疊雪輕○朗詠集扇詩云

盛夏不レ錯雪終年を盡レ風○班婕妤
怨歌行云新裁斎紈素皎潔如レ霜雪
裁為合歓扇團圓似明月○彩古今
集よ家隆卿の詠も彩を立のぼる
うへなきものを思ひなれ雪○粧富士
の雪ちぐく消てもみよ速妙也扇に其
時を形勢と粧を出し骨おもて雪氏
多む中富士ようへと云義也
月雪の二字いとなり扇なり

又班氏句より紈扇如圓月○班氏句素
團扇の事と此句也此四季百首より取
ものの枕ひきの扇の月影もなれてくやきかみ
なり事り○彩撰六帖より同作かれり
月よ雪を足し扇をもてこそ
へり是○夫木より後九條四大臣ようき和の
ひの是ようの事いかへの表の扇の月いかに
此三首ようれくと扇の事とをてこそ
南より月を出ようを雪京吉團扇

ゝゝゝゝや。杉よむゝゝゝゝあゝき。第

杉のゝよむゝゝゝゝ

○河清彩の人より枕帳つゝ之雲の絵賛を望まれて
清水のふつゝ水よりも翠あてゝまこ青紅う枕帳する
此おも涼書又おもをとる涼さ義さ紅なり
○百人の歌よたきもの石弾をすゝ也きゝ種紅かゝ
を湛ていと涼しうきれん
続種のなつの手て枕あをなぎく涼しゝ石る早すぐ薄
もゝき種の続目よ用る本紅俗よ枕と云
晋書云孫楚字子荆少時欲隠居謂
王濟曰当欲枕石漱流誤云漱石枕

流濟曰流非可枕石非可漱楚曰所
以枕流欲洗其耳所以漱石欲礪其
歯

○涼

薫風吹徹清涼殿　未廣不開簾不捲

我里あひて日影のもゝ松陰や春より秋の季まうつる風
暦よれ碗も松の下ゝ紅あゝば年のゆゝ三ケ月
拾遺集よ恵慶法師松陰の岩井のゝ水結ひ
ゆきく友ち紀ニしと思ひけり或○粗お二首

たゝ山おもて淡路の月の数のうきゆく
屋とゝ友の初なる事れど一首の仕てまて友
い言ゝ宵ゝ宵ゝ釈
井のゝよ友ゝいづくへ孫狩縄
正徹集ゝ初れゝ友も源井のつゝ縄ゝ
ゝよおつゝ志ゝ
○ある人来て世ゝ日柔川の涼ゝ
くゝ酒ゝていと涼ゝ童紀ゝ
酒ゝ清作ゝ

滝おゝ水ゝ山て涼ゝ甚柔ゝ
伊勢物語ゝ山科ゝ勝ゝ
て杉ゝ作ゝ
涼ゝ柔ゝ絵ゝ紀ゝ勝ゝ索疑
月影ゝ水ゝ涼ゝ
○ある人の園ゝ葉ゝ柔ゝ
見ゝ柔ゝ冷ゝ涼ゝ
○和名翡翠ゝ
家ゝ毛ゝ家ゝ

呂氏春秋蟬飲露○字彙翡大如鳩
毛紫赤翎點点青不深無光彩翠小
如鷃毛青黑色翎深青有光彩飛水
上食魚又鵝鴨尾後之肉曰翠○説
文青羽雀也增韻赤羽曰翡青羽曰
翠今俗呼翠曰翡翠○翡翠の和訓ハ
ヒみ蟬の羽衣ハ常の糸也ハ雪の羽をも衣と
作る詩多し活法も天長水遠網羅
稀保得重し翠碧衣と有り○狙ハ

鴨尾の肉とあるより鴨川をもむ川とも鴨
と同訓ゆへ引合す○毒を除い 好法院
御集子蟲の多も森の志め繩秋ゆてかゝ家
しき蟬の羽衣

○雷

雷とも人おどろかしいづちのぼゝみ小蛙のむ蛙なり
諫鼓の串つゝみ弟の下ゝ出り合見へ
○雷鼓の字ハ周礼地官の注ゝあり又愛
子ゝ云不言之訓聞千雷鼓

夕立はいきなりともいふつらいたゝかしてゆきなぐ。すれ
ちいとなりよりはいかに光りみて二階座敷へもすしき
○鳴神を猛みるゆゑ赤京師京氏とかく
絲よかるばおそろしげるき雷式まして赤京師式も赤京
白雨黒雲雷氣遣ハレ　如何誰在御前候
白雨いたなりと二の白い狂言高なるの詞也
候い宵顔まて瓜なる紙よる歌補よ虞韻の
叶とあり　仍今叶より以て引よ用也
○百合花

ゆりはいつゆ百合のむの家ゆゑをみよあよ　狂口咲
咲き当世ゆゑて狂口咲とゆふ咲ゆゑ
○床　友ゆゑ
家と蔓ちいひ筒いきて人世よ青しき森のも
古今集新拾ちゆふ筒ぶをとゆゑ咲
より妹とあゆる森友のゆれ○狂言竹の
筒よいきんと云義ゆ筒より世と云義ゆ
筒を助語ゆ用ゆ
接ゆをひゆすゆあゆのはしなづち

常夏のをしなでしこと云也　神代巻に云吾兒乃取而子養焉又云吾是國神騙脚摩乳我妻騙手摩乳此童女是吾兒也○朗詠集兩詩養得自為花又毋○東坡詩踈ら兩脚長

○畫顔の花

是ばの方おい寧予が美のら嫉とかりてもろ志影論語に寧予畫寢○莊子に云莊周夢為蝴蝶栩栩然○ひは称する人を世に貴る事より嫉とりて見るとも云

胡粉夕貝の面を染て見るとも云義こゆる

ゆ襷とも云

夕顔

夕うはより。。。

後京極殿のなまけ歌のなかの
の〳〵天皇一夕新のむ○相つれの男をひる
きみとふ名いこゆうどめでまてつけをう
けとそいひ侍るとそ
○栗(クリ)と小角(サゲ)のもをかける絵よ
世の中のもつたぶおとうな探とさげのもみて
○松とさげのかゝれる絵
いくつぶとかぞへぬもあるとそ十八云よかるさけい
註 俗よもそこ公十八さけと云

○祇堂(キヨウ)舎(ヤ)
祇堂舎の山よにぎよ山まゝ合のもぞかと
伊勢物語よりもとにまゝ月のかゝる山
の端よげくいまにもあゝ○淮南(ワナン)子(シ)云
魯陽公與韓構難戦酣(カンウナンヲタヽカヒテタケナハ)日暮(ヒイテホコヲ)援戈(ヒイテホコヲ)摩之日為之反(カヘルヲ)三舎(シヤ)○増韻三十里為
一舎(ト)○さ京よ戻(モド)り年と云あり狂おい
吟京よ乃ふい狂ふ合ふ拾(一子)を戻(モド)
を拵(ホコ)かと思ふい山の端の月も形し孤よ引

波を山は日の入るさまあるゆへなるべし

いさゆ（オシ）れと惜（ト）む面（オモ）あらん云也

○雲峯

綿（ワタ）いはのうへもたゆふほとかとてすゝしさを見るを

僧奉忠夏雲詩（ニ）如（リ）峯（ノ）如（レ）火（ノ）復（メヤの異ワタル）如（レ）綿

○夏衣

乙女（オトメノコ）がそらうらすゝしてはのくとぶうちぎの鳴（カ）ぬきぬれも人丸おもかけ取（ル）はすゝしれとよ出（ル）

着（キ）なれも友をもとめていとゝなく秋をのこるの芭蕉布（セウフ）

古今集物のなのよきの色のとゝまるよ時まもなくまとゝ日ハ一ぬるかんなをなくはく

論芭蕉一名牛乳蕉（ギウニウ）一種（レウ）其莖（リキ）鮮（セン）束（ソク）

如（レ）絲（イト）可（ニ）績（ウミテ）為（ニ）締（チ）紵（チヨ）○杜子美破（レ）家不（レ）及（ス）

記（ニ）芭蕉布（ヲ）いとゝ蕉（セウ）布（フ）の産（サン）あり

○松の蟬

蕭風（ソウフウ）の絲（イト）ゝ松（マツ）をくみ松（マツ）を除（ノ）つまびきの琴

李（リ）梅亭（ヲカ）蟬詩（ニ）薫絃（クン）寂寞（セキバクトシテ）無（シ）人（ノ）續（ツグ）故（ニ）操（イトメ）

清風（ヲナス）作（ニ）頌（ニウ）聲（ト）此（ノ）情（ノ）琴（ニ）云（ヒ）○家語（ケゴ）云

舜弾五絃之琴造南風之謡曰南風
薫兮可以解吾民慍云云此謂之薫絃
○退之詩欲和薫風琴○拾遺集斎
宮女御こゝろの琴の松風かなしいつまの
絃ゆゑ人知る○詩学大成琴詩急
詩寒蝉噪晩林○山谷松下渕明圖
詩松風自度曲我琴不須弾○劉徳
仁松詩過蹟合琴聲○中庸繼絶世
○夏越祓

ふるゝすゞしくもなるぬぶ指くゝ友と秋ゝの中陽祓
神代巻云素戔嗚尊到出雲之清地
焉乃言曰吾心清清之○古今集躬恒
かゝと秋とゝ思ふ心のかよひぢいかゝ深き
思ひ浦ら○堀川百首仲実八首第神
なごしふなびらんきふすめされ忘穢去
年○貞観百首為家年ゝ拾遺萬
の鶴乃所祓川流きくゝ長くゝ
ゝ松○夏越祓ハ中行お生お刻の義ト

郊の説あり。さ程事なき狂歌菅笑の移と
為事なる人なり。混沌傳を得る人形
ぶる事雅しい所なり。たゝひを古ふの
古人と張為事人田さまるさふ

雅遊酔狂集夏之巻終

斎藤蔵書

鶴池堂 伝写